

9. 成人型アトピー性皮膚炎患者の痒みに対する不安に関する検討(平成17年度心理科学研究科修士学位論文要旨)

著者名(日)	樋町 美華
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要 : J Psychol Sci
巻	1
ページ	116-117
発行年	2005
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006784/

果から C は退院時の GAF の分散の 17.9% を説明していた。女性では TCI の SD と有意な相関がみられ、回帰分析の結果から、退院時の GAF の分散の 6.2% を説明していた。

〔考察〕統合失調症、感情障害、神経症性障害、摂食障害、人格障害といった異なる診断カテゴリーに特徴的なパーソナリティは見出すことは出来なかった。しかしながら、女性において、TCI の ST が低いと摂食障害である可能性が高いことが示唆された。また、TEG による合成得点や TCI の性格次元と入院期間、退院時の GAF に関係が見られた。したがって、パーソナリティのアセスメントの結果から、入院期間や退院時の精神的健康度といった視点で、異なる経過をたどると予測される群を構成し、それぞれに異なるクリニカルパスを適用していくことが可能であることが示唆された。

引用文献

- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.
- Zander, K. (1988). Nursing case management : Strategic management of cost and quality outcomes. *Journal of Nursing Administration*, 18, 23-30.

9. 成人型アトピー性皮膚炎患者の痒みに対する不安に関する検討

樋町 美華

〔目的〕近年、アトピー性皮膚炎 (Atopic Dermatitis; 以下 AD) は成人期にまで遷延する例 (成人型 AD) が増加している。その原因に、AD 症状の増悪と不安の関連が指摘され (Linnet & Jemec, 1999), 不安が成人型 AD 患者の搔破行動を強めていることが明らかにされている (Jordam et al., 1974)。しかし、成人型 AD 患者の不安の対象は明確にされていない。また、成人型 AD 患者の健康関連 Quality of Life (健康関連 QOL) は、痒みや不安が原因となり低下しており (高

森, 2005), 成人型 AD 患者の不安が症状と健康関連 QOL に関連していることが指摘されている。しかし、十分な知見は得られていない。そこで本研究では、成人型 AD 患者の痒みに対する不安について明らかにし、またその不安が搔破行動と健康関連 QOL に与える影響について検討することを目的とした。

〔結果および考察〕

1) Itch Anxiety Scale for Atopic Dermatitis (IAS-AD) の開発

まず、成人型 AD 患者の痒みに対する不安を測定するための尺度がないため、その開発を行った。先行研究において AD 患者の悪化要因である 38 の刺激や状況を収集し項目を作成した。収集した項目は皮膚科医によって適切であると判断された。調査対象は学生群 294 名と AD と診断されている学生 AD 群 44 名であった。IAS-AD の因子構造を明らかにするため不適切な項目を削除し最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った結果、2 因子 17 項目を抽出した。Cronbach の α 係数を算出したところ、高い信頼性が得られた ($\alpha = .91$)。また、学生群と学生 AD 群の IAS-AD 得点について t 検定を実施した結果、学生 AD 群の得点が有意に高かったことから、IAS-AD の判別的妥当性が認められた。したがって、IAS-AD は高い信頼性と妥当性を有する尺度であることが明らかとなった。

2) IAS-AD が搔破行動および健康関連 QOL に与える影響についての検討

学生群 183 名および AD に罹患している患者群 84 名を対象に、IAS-AD 得点について t 検定を行った結果、患者群の得点が有意に高く痒みに対する不安が学生群よりも強いことが示唆された。成人型 AD 患者の痒みに対する不安が搔破行動と健康関連 QOL に与える影響について健常な成人と比較検討するため、学生群および患者群を対象にパス解析による多母集団同時解析を行った。モデルの適合度はおおむね良好であった ($GFI = .99$, $AGFI = .87$, $CFI = .99$, $RMSEA = .08$)。パス解析の結果から、患者群、学生群ともに IAS-AD から健康

関連 QOL には影響を与えないものの、IAS-AD の得点は掻破行動の程度（患者群：.76, $p < .001$, 学生群：.77, $p < .001$ ）と時間（患者群：.77, $p < .001$, 学生群：.75, $p < .001$ ）に対して強く影響を与えていることが明らかになった。

〔まとめ〕

本研究の結果から、成人型 AD 患者は痒みに対する不安を抱えていることが明らかとなった。また、痒みに対する不安から掻破行動に影響を与えていることから、痒みに対する不安を治療対象とすることで、患者の不安と掻破行動が減少し症状の改善につながるということが考えられる。したがって、成人型 AD 患者の痒みに対する不安へのアプローチが必要であることが考えられる。

引用文献

Linnet, J., & Jemec, G. B. E. (1999). An assessment of anxiety and dermatology life quality in patients with atopic dermatitis. *British Journal of Dermatology*, 140, 268-272.

10. 自律訓練法によって生じる不安反応のメカニズムに関する研究

古川 洋和

〔目的〕 自律訓練法 (Autogenic Training: AT) は、セルフコントロールによるリラクセーション法であり、わが国においては心身医学的治療法の 1 つとして用いられてきた (佐々木・笠井・松岡, 1988)。しかし、坂入 (1995) は、AT によって不安反応が生じる現象を報告している。そして、AT によって生じる不安反応に関するこれまでの研究では、AT 練習者の性格特性および、認知、AT 練習中の生理的変化について検討が行われてきたが、どのように不安反応が生じるかを解明するには至っていない。

そこで、本研究では、研究 1 において AT 練習者の性格特性および、認知の観点から、研究 2 において AT 練習中の生理的変化の観点から AT によって生じる不安反応のメカニズムを検討することを目的とした。

〔各研究の概要〕 研究 1 AT によって不安反応が生じる者の特徴に関する検討および、AT による状態不安変動モデルの構築から、AT によって生じる不安反応に関して、①特性不安が高い者は、AT 習得のキーポイントである受動的注意集中の達成が妨害され、不安反応が生じる、②不安感受性が高い者は、不安反応が生じるという 2 つのメカニズムが明らかにされた。つまり、性格特性である特性不安と認知である不安感受性が AT によって生じる不安反応に影響を及ぼす要因であることが明らかにされた。研究 2 AT によって生じる不安反応と生理的変化との関連について検討を行った結果、AT によって不安反応が生じる者は、末梢皮膚温、心電図 R-R 間隔から Lorentz plot によって算出される Cardiac sympathetic index (CSI) といった交感神経機能の中でも、アドレナリン作動性神経系が活性化されることが明らかにされた。つまり、アドレナリン作動性神経系の指標が AT によって生じる不安反応に対応する要因であることが明らかにされた。

〔総合考察〕 研究 1 の結果、特性不安が高い者には受動的注意集中の達成を促進させるような指導法が有効であり、不安感受性が高い者には、AT 以外のリラクセーション法を適用することの有効性が示唆された。また、研究 2 の結果、交感神経系の指標の中でもアドレナリン作動性神経系の指標を測定しながら AT の指導を行うことによって、不安反応に即座に対応できる可能性が示唆された。

最後に、本研究で得られた諸結果は、AT によって不安反応が生じる者に対する安全かつ有効な AT の指導法を提案するうえで有用であると考えられる。

引用文献

坂入洋右 (1995). 自律訓練中に不安反応が生じる患者の特性と不安反応への対応 自律訓練研究, 15, 30-39.

Sakairi, Y. (1995). Personality trait of patients who experienced anxiety response during autogenic training and how to deal with the